
漂流者はハイブリッドな現役将校

金貨の騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漂流者はハイブリッドな現役将校

【Nコード】

N0721X

【作者名】

金貨の騎士

【あらすじ】

地球、海鳴市にやって来た次元漂流者は魔法と質量兵器の両方を使用する軍人だった……。作者はこれが初挑戦な初投稿です。どうかよろしくおねがいします。

プロローグ（前書き）

はじめまして、金貨の騎士です。よろしくお願いします。

ブローグ

緊急報告

第374特別調査地区の探査中、突発的次元崩壊が発生。崩壊そのものは元々危惧されていたため特に問題は無く、調査地区の全技術データも回収に成功。

しかし、

その次元崩壊に1名、この部隊の指揮をとっていた《ファイア・レイガード》が巻き込まれ、行方不明となった。

彼の損失は第374地区の全技術データ消滅以上の痛手になるため、目下捜索中である。

ベルファイア連邦政府軍第七師団大隊副隊長リオル・ヴェルシア
中佐・記

第一話（大修正）（前書き）

いざ参らん本編に。

第一話（大修正）

―第97管理外世界・地球・海鳴市・18：28―

???side

・・・え〜と、とりあえず落ち着け俺、冷静になれ俺。ゆっくりでいいから自分の事を思い出せ俺。

名前はフィア・レイガード、二十歳、職業軍人、独身。よし、完璧。とりあえず・・・

――むくり

起きよう。しかし全身ズキズキするが特に・・・

「・・・頭痛えええ・・・。酒でも飲んだっけ？」

そうだ、さっきまでみんなで居酒屋にでも行つてそのまま路上で眠ってしまったんだ。そうに違いない。

断じて亜空間での任務中に事故つて時空をジャンプしたわけ・・・

《フィア・・・あなたが参加した飲み会は2年前が最後ですよ？》

「なんか俺が寂しい奴みたいな言い方だけど、仕事が忙しかっただけだからな！？そしておはよう！！リリア！！」

フィーアは左腕に着けている腕時計のようなサポートAI兼通信機のリリアに返事を返した。

「・・・リリア、いったい何が起きたんだ？」

《あなたがだいたい覚えてる通りだと思いますが？》

「構わない、状況を報告せよ。」

幾分口調をまじめにし、そう言った途端にリリアの口調もそれに応じるがごとく変化した。

《報告。民歴56年5月。我々第七師団I大隊は大隊長の指揮のもと突如亜空間に出現した第374特別調査地区の探査及び技術データの回収の任務を遂行。しかしその終盤で危惧されていた時空崩壊が発生、部下の退避を優先した指揮官1名が脱出に失敗、現在行方不明扱いとなっております。》

「その行方不明者ってのは当然・・・」

《あなたのことです。》

あちゃあ〜と額を抑えながらフィーアは呻いた。そういや新兵が時空崩壊から逃げ遅れていてそいつ助けてたら自分は間に合わなっかたんだっけな・・・

「一応確認するが俺の頑張りは報われたのかい？」

特にその新兵と自分の副官であり親友のリオルが気になる・・・

《死人0、行方不明者もあなただけ、というのが今の私の最後の記録です。》

「お前が言っならそうなんだろ・・・まあ少し気が楽になったよ。」

さて、これからどうしようか。通信機兼サポートAIのリリアに軍から通信が無いところを考えると、エライ遠くに跳ばされたんだろうな・・・。このリリアは銀河一個分離れた場所からリアルタイムで通信できる程高性能なのだ。そのリリアに通信が一個も無いということはここがリリアが圏外になるほど遠い場所にいるか、軍に捨てられたかの二択しかないのである。後者にいたっては自分は即行でクビになるほど上官にも部下にも嫌われてないので無い筈。ていうか後者だったら泣く・・・。

「まあ、何にせよここがどんな世界だか調べるのが先決かな？」

《そうですね、この世界の生活水準もさほど低く無さそうなのでサバイバルすることも無いでしょうからまずはこの世界の知識を集めましょう。》

「よし！そうと決まれば早速つk《警戒！！9時方向！！》・・・え？」

あゝ、俺そういえば路上にいたんだった。周り見りやリリアの言う通り割と文明高そうじゃん、てことは自分の世界にもあった車輪が4つ付いたアレ・・・

——ドキャア！——

・・・いつまでもいたら自動車が通るに決まっているじゃん・・・もつとも、“この程度”で俺は死なないのだが・・・。

キリミミ状態で空中を舞うさなか、フィーアは視界の端になんとも言えない表情でこちらを眺めている金髪の少女と犬耳の女が見えた気がしたがハッキリ確認する前にこの世界に來た時同様“また”顔面から地面に落ち、視界がブラックアウトするのだった。

《・・・先が思いやられます。》

第一話（大修正）（後書き）

感想、ご指摘お待ちしております。

プロフィール（前書き）

オリ主フィーアの紹介

プロフィール

名前 フィーア・レイガード

年齢 満二十歳

性別 男

職業 軍人（階級については黙秘）

容姿 赤みのある茶髪で瞳は紺色。

顔はよく優男呼ばわりされる程度に整っている。
やや長身長屈。

服装 故郷の軍隊の軍服と士官帽を装着。旧日本軍の軍服に似ている。

全体的に黒色で、控え目に金色の装飾とボタンが付いている。
フィーアの軍服はカスタムされており上着の裾が膝まで伸びている。

性格 基本お人好しだが、悪知恵がよく働くため抜け目が無い。

戦術 剣と銃と魔法と気功術

第二話

フエイトside

魔導士フエイト・テストロッサは困惑していた。

母親の指示のもと、ジュエルシードというロストログアを集めるため海鳴市を一通り探索し、ひとまず今日は切り上げ、自宅兼拠点にしているマンションへの帰り道の途中に倒れている男を見つけてしまったのである。その男がただの人間なら別に対処に困ることなかったのだが、

《マスター、あの男から魔力反応があります。》

自らの愛機バルディッシュのこの一言によりどうするべきか悩むハメになったのである。

（この管理外世界に魔法文化は無かった筈・・・ということは、あの人は時空管理局員か次元漂流者のどちらか・・・）

今、自分たちが管理局と接触するのは非常にまずい。しかしこのまま放置した場合、後々敵として脅威になるかもしれない。何より漂流者だった場合、彼女の性格上ほっとくこともできなかった。

この葛藤としばらく戦い続けること数分、

「——エイト、フェイトったら!!」

「っ!!、ごめんアルフどうしたの？」

使い魔のアルフが声をかけてきた・・・というかさっきから呼んでいたらしい。集中しすぎて聞こえなかったようである。

「アイツ目が覚めたみたいだよ。」

そう言われアルフの指さした方を見ると確かに男はむくりと起き上っていた。改めてよく見てみると、その姿は全身黒色で物々しく、腰には日本刀とレイピアが合わさったような剣がぶら下げられていた。

——確実にこの世界の人間じゃ無い。

フェイトはそう結論付け、一層警戒しつつ観察することにした。

「・・・なんか一人で喋りだしたね。（・・・変な人。）」

「いや、左腕に付いてる何かに話しかけてるみたいだよ。」

「アルフ、見えるの？」

「フェイトがバルディッシュと話してる時もあんな感じだからなんとなく・・・。」

「・・・。」

一瞬痛い人に見えたあの人と同じようなことを自分がしてることを知って少し凹んだフェイトだった。

そうやって落ち込んで顔を俯かせている間に男は何かを決心したように立ち上がったのだが・・・

「・・・あつ。」

——ドキヤア——！！

アルフの間の抜けた声とすさまじい音が聴こえたので顔を上げて視線を向けると、男が自動車に派手に撥ねられていた。途中、目が合ってしまったが気にする前に男は顔面から地面に落ちた。

突然のことに二人はパニックに陥った。

「ど、どど、どうしようアルフ!？」

「落ち着くんだフェイト!!え」と、こういう時は911だから117とかいう場所に電話するんだ!! あれ?なんか違う気がする・・・」

「私、電話なんて持っていないよ!!」

「あゝもう!!どうすりゃいいんだい!？」

——二人がカオスの極地に陥るその間際、それをくいとめる存在が現れた。

「痛えな畜生!!いきなり過ぎんだろぅが!!何が『警戒九時方向』だ!!」

《気づけなかったうえに避けなかったことが恥ずかしいのは解りますが私に当たらないで下さい。》

何事も無かった（？）ようにピンピンしながら混乱の元凶がもう復活していた。

フェイトとアルフはもう啞然とするしかなかったのだが、もう彼を無視できない存在であり状況であると覚悟した。なぜなら・・・

「さて、余計な会話はここま《凶星だったんですね？》やかましい！！・・・おい、その二人。

少し一緒に会話するのと口封じされるの、どっちがいい？」

元凶^{フィニア}がこっちに向かってそんなことを言ってきたので二人は再び混乱しそうになった。

第三話（前書き）

文才が欲しい……。グダグダ感が無くならない……。

第三話

フイア s i d e

・・・我ながらこれはないわ Orz。いきなりこんな小さい子に「お話と口封じ」の二択って俺なに言っちゃてんだろぅ……。あゝあ、金髪の子はなんか武器的出すし、犬耳は牙剥いてるよ……。リアの言う通り、いつも軽く“避けれる”筈のモノにまるで反応できなかったことに動揺していたのもあるが、それを差し引いてもさっきのセリフはナイ……。

《大人げない、みにつちい、最低、チンピラ、外道……》

「それ以上言わないでくれ、トドメになる……。えゝと二人とも今は本気にしないでくれ。お話したいのは本音だが、危害を加える気は無い。」

《おまけにロリコンですか。》

「今のでなんでそうなる!？」

「……。あの、すみません。先に一つ訊いていいですか？」

「おつとすまなかつた、いいぞ何だ？」

「・・・あなたは時空管理局の人ですか？」

若干緊張を含んだ口調でそう訊いてきた。今ので分かったことが四つ。

1つ。時空管理局なる組織が存在する。

2つ。彼女の口調からして、これは俺が敵か味方かを確かめる質問。

3つ。つまり時空管理局とそれに敵対する勢力がある。

4つ。彼女らはそのどちらかに所属してる。

（て、とこだろう。さて一番無難な返事は・・・）

「とりあえず、俺は時空管理局がなんなのか知らない。」

馬鹿正直に答えることにした。どうやらその選択は正解だったよう
で彼女の緊張が少し解けたようだ。

フエイトside

（最初の「口封じ」発言にはすごい焦ったけどそれほど敵意は持っていないみたいだし、何より時空管理局ではないなら大丈夫かな？）

バルディッシュを起動したままだがフエイトはそう思い、少し警戒を緩めた。

「じゃあ、あなたは次元漂流者なんですね？」

「それもなんなのかわからないが別世界から流れてきたのは認める。」

それを聞いてとりあえず一安心することにした。次元漂流者なら自分達と特に敵対する理由もないはずなので戦うこともないだろう。

（でもコイツ十分胡散臭いし、怪しい奴だと思っよ？変な格好してるし・・・）

念話でアルフが話しかけてきた。確かに目の前の人はこの世界でも自分達の世界感覚からしても異質な格好である。軍服で堂々と帯剣してる人なんて尚更初めて見た。

・・・確かにもう少し素性を訊いたほうがいいかもしれない。と思
った矢先、

《変質者の称号もGETしたようですね》

「もしかして八つ当たりしたこと本気で怒ってるのか！？あと犬女、
前半二つはともかく最後の一つは撤回しやがれ！！」

「アタシは狼だ！！って、アンタ今の念話聴こえたのかい！？」

「ん？思念通信でなく念話って言うのかそれ？」

《通信用電波使ってないと思ったら魔力しか使わない別物のようです。
一応通信波は拾えますが。》

いきなり会話に乱入してきた。しかも知らない言葉が出てきた。

「思念通信？」

「俺達の世界の通信手段のひとつだ。ていうかいい加減にお互い名

前くらい名乗らないか？」

そつえばまだお互いの名前すら知らなかった。

「それもそうですね。私はフェイト・テストロッサ、魔導士です。」

「フェイト！？」

まさかすんなり名乗るとは思わなかったのでアルフは驚いた。

「多分この人は見た目ほど悪い人じゃないから大丈夫だよ。」

——見た目は悪いってことかよ…とフィーアが落ち込んだのは内緒である。

「フェイトがそう言うなら……。アタシはフェイトの使い魔のアルフだよ。さっきも言ったけど犬じゃなくて狼だからね？」

「それと、私のデバイスのバルディッシュです。」

《よろしく願います。》

ファイア side

金髪の女の子がフェイトで、犬耳…じゃなくて狼耳がアルフで、武器がバルディッシュか。バルディッシュにもリリアと同じように自我を持ってるようだな……。うちの子に影響されなきゃいいが…。

「次は俺たちの番だな。ベルファイア連邦政府軍、L大隊所属ファイア・レイガードだ。」

《先行試作型装着式オペレーター、No12、リリアです。》

全く聞き慣れない単語が出てきたせいかフェイトとアルフはポカンとしていた。

「…えっと、リリアはデバイスじゃ無いの？」

フェイトがリリアに尋ねた。

《あなたの言うデバイスとは、そのバルディッシュが基準と考えていいですか？》

コクリと頷いて返す。

《デバイスは器はともかく原動力や構成、発生させる物のほとんどが魔法や魔力のようで、しかも武器としての役割が多いようですね。ですが私の場合、デバイスと違い魔法より機械の割合が多めで造られています。なにより私はどちらかというとコンピューターや通信機のような役割が仕事です。》

「これ俺達の世界では普通なんだけど聞いたことない？あとベルフィーア連邦も？」

「全然」

「・・・こりゃ本格的に帰れないことを覚悟しなきゃいけないかもしれない。この技術は自分の世界だけでなく全“同盟世界”での常識なのだ。ここは完全に自分の知らない世界で、知らない宇宙のようだ。」

「まあ、いいや。とりあえずよろしくな。」

「うん。よろしく。」

・・・そういえば、いつのまにかタメ口きかれとる。

こうして魔導士と将校の邂逅はようやく一段落した。

第四話

フイーア side

自己紹介も終わり一息つき、立ち話もなんなので歩きながら話すことにした。その途中、時空管理局と次元漂流者の説明をもらった。正直、時空管理局とは組織的に接触したくないし、自分の世界と接触させるとヤバイ気がする……。なんて考えてたら、

「ところでさあ。」

「ん？」

「フイーアの世界ってどんなところなんだい？」

アルフが尋ねてきたきた。

軍事関係ならともかく故郷についてなら幾分喋ってもいいか……。

「俺の世界はな、リリアを見てだいたい分かると思うけど科学と魔法が共存してる世界なんだよ。魔法を科学で補い、科学を魔法で補う。俺達自身は“魔道科学”って呼んでるけど。おかげで周囲と比

べて随分と出鱈目な世界になってるけどな・・・。」

「へえ、なんかよく解ないけどすごいんだね。」

——よく解なかったのかい・・・

「・・・そして、その出鱈目な技術を使って時空管理局のように別世界と交流がある。」

「「え!?!」」

今の発言でフェイトも会話に参加してきた。さっきの管理局の説明を聞く限り、別世界：もとい別次元世界だっけか？と交流する技術を有するのは管理局のあるミッドチルダとごくごく一部だけ、みにいってたがここまで驚くことかね？

「そんなにすごいのか?」

「少なくとも私たちは管理外世界や認知外世界でそういう世界は聴いたことがないよ。」

「うーん、ますます管理局と会いたくないな・・・。」

接触したくないのにあっちが興味を示すようなことのオンパレードじゃねえか……。

「どうして？ 私たちはともかくフィーアは次元漂流者だから保護してもらえば……。」

——“私たちはともかく”ってやっぱこの二人、管理局とトラブル抱えてるのか……

《そのあとがマズイのです。》

「リリア……？」

しばらく喋ってないからいるの忘れてたよ……。

《仮に保護してもらって私達の世界、ベルフィーア連邦に送ってもらったとしてその後、時空管理局が連邦をほっとくとは思えないのです。》

「さっきも言ったが俺達の世界の技術の半分は科学だ。それに比例して軍事力も半分以上が科学兵器……管理局が根絶を目指す質

量兵器つてやつなんだよ。交流のある同盟世界にいたっては、連邦のおかげで魔法の存在は知ってても馴染まないで科学一筋の世界もあるくらいだ。」

もし連邦がこの地球みたいに魔法文化がなければ管理外世界ということで片付くのだが、生憎かなりの高水準で普及している。十中八九接触を目論むだろうがその半面、自らが否定する質量兵器も同じくらいの割合で存在している。管理局は間違いなく質量兵器、すなわち科学を捨てると言いかねない。そして連邦がそれに従うわけもない。最悪戦争に発展しかねない。

「つーわけで何かしら考えてからじゃない限り管理局とは会いたくない。」

「アンタも大変だねえ……。」

ただでさえ遭難中だったのに敵対勢力候補の存在って、もう胃が死ぬわ……。

「本当にこれからどうし——ん？」

《北部数キロ先に魔力反応を確認！！かなりの出力です！！》

リリアの言う通りかなり大きな魔力を感じた。これは放置したらマズイレベルだなオイ・・・。

「ッ！！フェイト！！」

「ジュエルシードだ・・・！！」

二人はコレの心当たりがあるみたいだな。

「おいフェイト、これはいったい何なんだ？」

「ごめん、説明できない・・・。とにかく私達はもう行かなきゃいけない。行くよアルフ！！」

「待つてよフェイト！！えっと・・・じゃあね、フィーア。とにかく頑張りなよ！！」

そう言つてフェイトは飛び去り、それを追うようにアルフも飛び立った。魔力光の光で二人が流れ星のようだったのは措いといて、フィーアはあまりの急展開にしばしポカンとしてしまった。別に二人が飛んだことには驚かなかったが、災害レベルの魔力反応の発生源に迷わず即効で向かつて行った二人に啞然としていた。

「大丈夫か？あの二人・・・。」

《発生直後程の出力はありませんが現在も反応は消失していません。》

——そうか、だったら・・・

「行くか・・・。」

《あまり目立つ真似をすると管理局とやらと接触する可能性が増えるのでは？》

「ここが連邦の未開の地で、管理外とはいえ管理局の縄張な時点で接触は避けないさ…それに、あんな子供をほっとくわけにもいかないだろ？」

またコイツ《ロリコン》とか言ってからかっつきそうだが、あんな10歳にも満たない子供が危険な場所に行ったというのに軍人の自分がそれをほっとくなんて出来るわけないし、する気もない。

《あなたらしいですね。》

意外と普通に喋ってきた。

「そりゃどうも。ついでに言っとくが俺はロリコンじゃねえぞ?」

《知ってますよ。そして、あなたがお人好しなことも。》

そして、リリアは改めて言う。

《ついて行きましょう、どこまでも。》

フィアは短く、だが真剣に返す。

「感謝する。」

——その日、海鳴の夜空に金色と朱色の流星を追うように黒い影が空を舞った。

第四話（後書き）

次回初戦闘描写。書けるかな…。

第五話（前書き）

本格的な戦闘は次回になっちゃいました・・・

第五話

アルフside

アタシの御主人様のフェイトは一流の魔導士で、なにより優しい傲慢の主だ。でもちよつと天然なところもあつて、なんだかんだ言つて年相応の女の子なんだと思う。それはいいことなんだろうけどやっぱり・・・

「今は勘弁してほしいよおおおおおおお！！」

アルフはそう絶叫しながらその傲慢の主、フェイトを抱えて爆走していた。なんでこんな状況になったか説明するため少々時間を戻す。

〈十分程前〉

「反応があつたのは、ここだね・・・。」

使用者の願望を歪めた形で叶えるといわれるロストログア、ジュエルシード。その反応を辿つて二人は山の方までやってきた。

（あの鬼ババにフェイトが酷いことされないうちにさっさと全部終

わらせないと・・・)

内心でフェイトの母親に毒づきながらも周囲に被害が出ないように結界を張りながらジュエルシードを探す。ところが違和感に気付いた。ふいに視線を向けるとフェイトが棒立ち状態で固まっていた。おまけに使い魔の自分は主の精神とリンクしているためフェイトの今の精神状態が分かるのだが、さっきから上の空というか呆けているというか、とにかくボケっとしていた。

「ちょっとフェイト、なにボケっとしてんだい。」

不審に思いながらフェイトの方にアルフは歩み寄る。

「フェイト！！いったいどうして・・・。」

そこから先は言葉が続かなかった。なぜならフェイトが見ているものをアルフも見ただからである。

—— 8つの目をギラつかせ、8つの足を蠢かす、“人間サイズ”になった蜘蛛の群れがそこにいた・・・

〈回想終了〉

そんなわけで、今アルフは目をグルグル回しながら顔を真っ青にして気絶したフェイトを抱えながら、ジューエルシードで巨大化した（種族的に繁栄したいとでも願ったらしい）蜘蛛の大群から全力で逃げていた・・・。

「ていうか何でそんなに足速いのさ！？ぎゃあああああああ！！」

飛びかかってきた一匹を必死に避ける。長い8つの足をゴキブリのごとく高速で動かしながら、使い魔のアルフとほぼ同等のスピードで蜘蛛は追いかけてきている。今すぐにでも結界を解き、そのまま空を飛んで逃げたいが、蜘蛛が外に被害を出すかもしれないので多分フェイトはそれをよしとしないだろう…。せめてなにかしら指示をくれればいいのだが当の本人はただいま絶賛失神中である。

「あゝもっつ！！お願いだからフェイト起きてええ！！」

「う・・・ううん・・・。」

「フェイト！！」

フェイトさんがロゲインしました。

「あれ？アルフおはよう。」

「寝ぼけてないでアレなんとかしておくれよ!!」

「え？（巨大蜘蛛の大群を見る）・・・キュウツ・・・。（ガクツ）

」

「ちよつとおおおおおお!!?」

フェイトさんがログアウトしました・・・。

巨大蜘蛛さんがログインしました。（ピヨーン）

シャアアアアアアアアアア!!

「来んなああああ!!」

もう駄目だと思ったその時、アルフでもフェイトでもない誰かの声が響いた。

「伏せっ!!」

アルフは反射的（本能とも言う）に姿勢を低くした。その直後、頭上を青白い閃光が通り過ぎ、飛びかかってきた蜘蛛に直撃した。蜘蛛はそのまま吹き飛ばされ、ジュエルシードの効力がなくなり空中で霧散した。アルフは何が起きたか分からず、とりあえず後ろを振り向く。すると、さっきまで自分たちを追いかけてきた蜘蛛の群れが追跡の足を止めていた。まるでこちらを威嚇するように・・・。

「まさかホントに伏せつつって伏せるとは・・・。」

《結局、狼も犬科ですからね。》

声のした方、前を向くとそこには左手に銃身がやや長めのピストルを持ったファイアがいた。

「ア、アンタついてきたのかい！？ていうか封鎖結界はどうしたのさ！？？」

《私が解析して勝手に入口を作らせていただきました。今はちゃんと閉じてありますのでご安心を。》

「そんでアルフよ、このゲテモノ集団はなんだ？放射能でもぶちまけたのか？」

《全個体に魔力反応を確認。出力は分散して劣っていますが最初の反応物と同種のもので。ですが発生源である反応物は別の場所にいるようです》

「ややこしいから最初の反応物を『ターゲット1』とする。こいつらは『エネミー』として随時番号を追加、同時にお前は『ターゲット1』を探知しろ。」

《了解》

着々と話しを進めていくフィーア達にアルフは戸惑った。

「ちょっと、アンタら何する気だい!？」

「この騒動を静める。」

「ジュエルシードはホントに物騒なモノなんだよ!？」

「そんなのコレ見りゃ分かるさ。ついでにあのフザケタ出力でこの不安定具合・・・、災害どころか下手に暴走させりゃ世界滅亡クラスじゃねえか・・・。」

《直接破壊するのは危険なので制御して強制停止させましょう。》

フィーア達はアルフとフェイトがやろうとした『ジュエルシールド封印』とほとんど同じことをするつもりらしい。しかもこの二人（一人と一機）、よく考えると自分の張った結界にすんなり侵入してきたのだ。魔法の腕もそれなりなのかもしれない。なにより、あの蜘蛛の大群にはもう精神的にも本能的にも戦う気力が湧かなかった。フェイトにいたっては、まだ意識すら戻って無かった……。

「……じゃあ、任せるよ。」

結局フィーアとリリアに任せることにした。

「はいよ任せな。さて、単独の戦闘なんて本当にいつぶりだろう……。」

《し大隊の隊長になってからは誰かしら随伴してきましたからね。あなたの階級を考えると異常に少ない人数でしたが……。》

「上の連中が「戦果に見合わん」って言いながら無理やりよこした階級なもの。大尉以上のことはやりたくなかったのに書類仕事が増えたのなんの……。なにせよ、久々に遠慮せず殺らせてもらう。そろそろ索敵終わった？」

《完了しました。アルフさんが張った結界の中に『エネミー』が1
く48体、周囲に展開中。さらに『ターゲット1』と思わしき反応
が北東に確認されています。》

それを聞いたフィアは右手で剣をゆっくり引き抜き、口角を吊り
上げ、獲物を見つけた肉食獣のような表情を浮かべた。アルフは場
の空気が変化した気がした。

「数はさっきのを入れて50匹……。少々もの足りないが、これ
からの厄介事への準備運動だ……。せいぜい長引かせるよ……。」

今のフィアにフェイト達と出会った時の雰囲気は一切なく、そこ
には一匹の獣がいた。

《全『エネミー』、行動を開始しました。こちらに接近してきます。
》

——瞬間、獣が雄たけびを響かせた。

「交戦を開始する……。来るがいい虫けらども!!一匹残らず滅
ぼしてくれる!!」

——異世界からきた漆黒の魔獣が咆哮を上げ、戦場に踊り出た。

第五話（後書き）

フィアのセリフが厨二臭くなっちゃった・・・orz

第六話（前書き）

ぐああああああ戦闘描写が書けねええええええええええ！！

第六話

フエイトside

「あれ？アルフおはよう。」

「さっきとまるっきり同じセリフだね……。また気絶しないでよ。・・・？」

「気絶？・・・ッ！！」

言われてトラウマ確定のあの光景を思い出す。

「ア、アルフ！！蜘蛛は！？ジュエルシードはどうなったの！？」

「とにかく落ち着いて。そして蜘蛛共はホラ……。」

そう言つて横を指差す。視線をそちらに移した瞬間、壮絶な光景が目に入った。黒い影が大蜘蛛の群を相手に大暴れしていた。青白い閃光で撃ち抜き、鋭い斬撃を叩き込み、強烈な蹴りを喰らわせ、蜘蛛たちは黒い影により次々とその数を減らしていった。

《現在確認できるのは『エネミー』が8体と『ターゲット1』のみです。》

「フン、つまらん……。オラア!!その程度か!？」

「……ファイア!？」

自分のやってることに関わらせないため挨拶もそこに置いてきた筈の男、ファイアがいた。

「アルフ!!どうしてファイアがここにいるの!？」

「どうやら付いてきたみたいでさ……。アタシの結界もアッサリこじ開けて、しかもコイツらをどうにかしてやるっていうから任せた……。」

「なんで!？」

「だってフェイト起きないんだもん……。」

「・・・ごめん。て、そんな場合じゃ無いや！！コレは私たちがやらないと・・・。」

「もう、終わるみたいだよ？」

「え？」

蜘蛛はもう3匹しかいなかった。完全にフィアに恐れをなしたように、蜘蛛共は怖気づいたようにギリギリと威嚇しながら後退していた。

《残りはこの『エネミー6、14、29』と『ターゲット1』のみです。》

「そんじゃ飽きたし、もう終わらせるか。」

瞬間フィアは駆け出す。蜘蛛が迎え撃つように上下に二匹、同時に跳びかかる。それにフィアは微塵も焦らず軽くジャンプし、足を狙ってきた一匹を避けながら銃弾を叩き込み、そのまま頭上に跳びかかってきた一匹を剣で貫いた。瞬く間に二匹は霧散した。

「ハイ、ラスト。」

振り向きざまに後ろから跳びかかってきた最後の一匹に回し蹴りを喰らわせ、宙を舞ったところに銃弾を放つ。青白い閃光、リニアガンの弾丸が蜘蛛に直撃し霧散させた。

（暴れ始めてから2分たって無いと思うよ・・・？）

（す、すごい・・・。）

改めてフィアが軍人、兵士であることを認識した瞬間だった。

《『エネミー』の殲滅を確認、残るは『ターゲット1』のみです。》

「了解。おや？起きたのかフェイト。」

フィアはこっちに気づいて近寄ってきた。

「・・・フィア。なんでついてきたの？」

「俺の職業は軍人って言っただろ？こういう厄介事には首突っ込まなきゃ気がすまない体質なんだよ。」

「でも……。」

「ちょいタンマ、本命が来るらしい……。」

《巨大な魔力反応の接近を確認、『ターゲット1』です。》

「ッ！！バルディッシュ！！」

《Yes・sir・》

フェイトはデバイス、バルディッシュを起動させた。アルフも戦闘態勢に入る。

「ん？そのまま休んでいいぞ？」

「そういうわけにもいかない……これは私たちがやらなきゃいけないんだ……。」

「……しょうがねえな。ただし、無理矢理にでも手伝わせてもらっぞ？。」

「せっかくだし、手伝ってもらおうよ。フィーアってすごく強いみたいだしさ?」

「・・・分かった。」

アルフの言葉もあり、フィーア達にも手伝ってもらうことにした。自分のやってることに巻き込むのは本音を言つと躊躇うところがあるのだが、実際に先ほどのフィーアの戦闘を見るかぎり、フィーアの戦闘技術は凄まじく高く、さらにアルフの結界に侵入できるほどの魔法の腕もあるので心強いものがある。そもそも、自分が気絶してる間に大蜘蛛の群を蹴散らしてもらった時点で今更な話なのかもしれない・・・と、そこへフィーアが話かけてきた。

「ところでフェイト、お前らあの物騒な魔力反応物を・・・壊してきたのか?」

「違うよ!!それにジュエルシードは無理矢理壊そうとしたら大変なことになるんだよ!?」

血相を変えて答えた。下手にジュエルシードに刺激を与えて暴走させた場合、次元震が発生し世界が崩壊することもあるのだ。当然そんな真似はしない。

「それじゃあ、そのジュエルシードとやらの壊す以外の止め方は知ってるんだな？」

「うん。」

「じゃあ、ジュエルシードはフェイトに任すわ。リリア、『ターゲット1』の情報は？」

《分析の結果、『エネミー』が一回り巨大化しただけでしかも動きが鈍いようです。しかし、魔力反応の発生源はコイツで間違いないようです。接触まであと3分です。》

「「うわぁ・・・」」

さっきの大蜘蛛達より大きいと聞き、フェイトとアルフは顔を青くした。そんな二人に苦笑いを浮かべながらフィーアは話を続ける。

「親玉とでも呼ぶか・・・。アルフ、結界を造れるなら相手の動きを縛る魔法とか使えるよな？」

「使えるけど？」

「即席の作戦だが、まずリリアが親玉が来る場所をピンポイントで特定。アルフが魔法で動きを止め、俺が親玉を“半殺し”にする。魔法とダメージの二重拘束で動けないところをフェイトにジュールシードの封印を直接やつてもらふ。それでいいか？」

ほとんど無駄がなく、お手軽な作戦だった。二人は即座に頷いた。それと同時にリリアの声が響く。

《『ターゲット1』接触まで1分かりました。アルフさん、座標イメージを思念通信…念話で送りますね。タイミングも私がお伝えします。》

「分かったよ。」

「私は？」

「俺達の後ろで待機。万が一、拘束する前に封印担当のフェイトが攻撃されるとこまる。」

《みなさん、来ましたよ。アルフさん、10秒後に指定した場所に魔法を。》

「え？どこにいますんだい？」

もう見えてもいい筈なのに親玉が一向に見当たらない。アルフは困惑した。

「いないじゃないk《8、7、6、…》ちょっとリリア？」

そんなアルフを余所にリリアはカウントを続けた。

《3、2、1、0！！今です！！》

「ああもうつ！！【チェーン・バインド！！】・・・って、ええ！？」

リリアの合図に若干疑いと戸惑いを浮かべながらアルフは拘束用の魔法を放った。しかし、リリアに抱いた不安は即座に杞憂に終わった。親玉は本当に現れた。“上から”・・・。着地点とそのタイミングをリリアは完全に予測していた。そしてそのリリアの合図により放たれたアルフの魔法ま完璧に決まった。しかし、親玉の図体は伊達ではないらしく、無理矢理振りほどこうとしていた。

「ヤバイ！！このままじゃ、強引に解除されちまうよ！！」

「そのために俺がスタンバイしてんだよ。」

そんな光景を尻目にフィーアは素早く、尚且つ柔らかく自分の剣を目前で振るう。すると剣が振るわれるたび光の線が引かれた。それを巧みに操り、みるみる内にフィーアは剣で光輝く魔法陣を絵描き、完成させた。そして……。

「……魔剣ヴィルガロム、魔銃モード。」

そう唱えた瞬間、フィーアの剣が黒い煙のようになったと思ったら即座に再度集合し、形を作った。ただ、フィーアの右手には剣では無く、普通のよりこつくて銃身が長い黒い拳銃が握られていた。

「【バスカヴィル・ショット】！！」

黒い銃口から放たれたのは純粹な魔法弾。魔弾はフィーアの描いた魔法陣を通過した途端、その魔力を激増させ10倍以上のサイズに巨大化した。弾丸から砲弾になった魔弾は、アルフの魔法にもかく親玉に無慈悲にも直撃した。凄まじい轟音をたて、爆炎が親玉を包んだ。

《『ターゲット1』の動きが停止しました。…いや、ちょっと待って下さい。『ターゲット1』の反応が消滅していきますー！！』》

「マジで！？もしかして加減ミスった・・・！？」

「大丈夫だよファイア。ジュエルシールド本体が現れるだけだから。」

フェイトの言葉の通り親玉の姿は消え、そこにはひっくり返った常識的サイズの蜘蛛と、光り輝く蒼い宝玉があった。

「アレが、ジュエルシールド・・・。（リリア、こっそりデータとつとけ）。」

《（了解）》

「手伝ってくれてありがとう、ファイア。あとは私に任せて。」

「おう。」

そう言いながらフェイトはジュエルシールドに向かっていく。そして・・・。

「ジュエルシールド、封印！！」

——夜の大騒動はようやく終息を迎えた。

第六話（後書き）

やばいです・・・文がまとめれてる気がまったくしないです・・・

第七話（前書き）

ちよつと無理やり過ぎた…？

第七話

ファイア side

ほとんど化物退治になった魔力反応物：もといジュエルシード封印作業。その決着がつき、ようやく三人は一息ついていた。しかし、ファイアはフェイトたちと休みながらも思考にふけていた。

（このジュエルシードがヤバイ代物なのは解かるが、“この二人のこと”が分からん……。）

このジュエルシードはロストログアと言って早い話、超危険物なのである。そしてこれの始末は先程の説明の通りだと、ファイア自身の見解は置いとくとして、この次元世界の警察組織である時空管理局とやらの役目らしい。百歩譲ってフェイト達が時空管理局に自主的に協力してると言うのなら、こんな若い年齢で危険なことをするのは無理やり納得したかもしれないが……。

「ところでフェイト、それ（ジュエルシード）どうするんだ？時空管理局にでも届けるのか？」

「えっと、その……それはちょっと……。」

さつきから時空管理局のこととなると齒切れが悪くなるこの二人。まあ、最初の方で管理局と会いたくないみたいなのを言ってたから薄々勘付いているが、フェイト達は管理局から見たら犯罪者予備軍、もしくは犯罪者になることをしているのかもしれない。だが、解せない。さつきからフェイトもアルフも無関係な人を極力巻き込まないようにしながら立ち回っている。そんな二人が自分自身悪いと思っていることを自ら進んでやるとは思えなかった。

「じゃあ、なんでこんなことしてるんだ？」

「それとも言えない……。」

話が進まねえ……。あ、そうだ（ニヤリ）。

「じゃあ、質問を変えるわ。時空管理局の常識は誰に教えてもらった？」

「?・・・母さんにとリニスに。」

「（誰だリニスって…ま、いいか。）管理局に関わるなつったのもフェイトの母さんとリニス？」

「母さんだよ。それがどうかしたの…?」

「フェイト…お前、その母さんにジュエルシード（それ）探して来
いって言われたんだろ?」

「ッ!?!」

図星か……。世界の法律である時空管理局のこととそれに反する
行為を促すなんて矛盾を仕込むことは、このジュエルシードに
フェイトを関わらすためのことに他ならない。ということはつまり、
フェイト達にそのことを教えた者も当然関係者である。そして、フ
ェイト達は自らこんな真似はしない筈。そこからフェイトの母親が
指示したと推測した。

「と、いうわけだ。」

「・・・ファイアの言う通りだよ。私達は母さんに言われてジュエ
ルシードを集めているんだ…。」

視界の端で、急な展開についていけずにアルフがオロオロしていた
のは無視するとして…やはり、そうだったか。それにしても、こん
な取り扱い要注意の危険物を集めてどうする気なんだフェイトの母
親は?・・・ん?、今なんて言った?・・・“集めている”だと・
・?

「ちょっと待てフェイト、集めているってことはまさかジュエルシードってこの一個だけじゃないのか!？」

「え? そうだよ。ジュエルシードは全部で21個あるんだよ?」

「ハア!？」

「1個でもそうとうヤバイのに全部で21個だと!？お前ら俺の胃袋によっぽど穴空けたいらしいなオイ!!」

「もう、目的とかどうでもいいや……。一応確認するけど、とりあえずフェイトとアルフはジュエルシードを全部封印して持ち帰るんであって、暴走させて世界を滅ぼすわけじゃ無いんだな?」

「当たり前だよ!!」

「なら一安心だ…。フェイトの母親が何考えているのか不安だが、フェイトに集めろって言ったからにはそれなりの数が揃うまでは平気だろう…。それまでに色々対策考えておくか…。だが今はとりえず…。」

「俺もジュエルシード集めに協力させてもらおう。」

「「え!?!」」

「もう今更無関係とは言わせねえぞ? だいたい、自分が今いるこの世界が滅ぶ可能性があるのにそれをほっとけるわけないだろ?」

《そもそも軍人の我々が人命に関わることに無視できるわけないでしょう?》

「リリアまで……。」

「フェイト、フィーアたちに手伝ってもらってこんなことさっさと終わらせようよ。」

ほんの少し考えたが結局……。

「分かった…。改めてよろしくフィーア。そして、ありがとう…。」

「なに、礼には及ばないさ。アルフもよろしくな。」

「ああ!?! よろしく頼むよフィーア!?!」

「……こうして三人は、しばらく行動を共にすることが決まった。だが三人はまだ知らない。この出会いがその後大きな波乱を呼ぶことを……。」

「オマケ」

「ところでフィア、アンタずっとその格好なのかい？」

アルフはそのままだが、フェイトはバリアジャケットを解除して私服になっている。しかし、フィアはこっちに来た時と同様、黒い軍服のままである。

《この世界の常識の検索結果から考えると、今のフィアの格好はイタイ人です。》

「それはイヤだな……。よし、【服装換装】。」

《了解》

するとフィアの軍服がその形を変え始めた。帽子と上着は一体化

してフード付ジャンパーに、ズボンはジーパンになり今風の服装に変わっていた。フェイトとアルフは呆然としていた。なぜならフェイトのバリアジャケットのように魔力を一切感じなかったのである。つまり……。

「フイーア…もしかして今の魔法使っていないの…?。」

「ん?これうち(連邦)の科学技術。」

《こんなの一般市民でも持ってますよ?》

「す、すごいんだねフイーアの世界って……。」

魔法を使わず魔法染みたことをするフイーアの世界にただ驚愕するしかない二人であった。

第七話（後書き）

感想、ご指摘お待ちしております。

第八話（前書き）

またタイトル変えようかなあ
…？

第八話

??? side

気づいたら周りの全てが真っ黒だった・・・否、床は赤い、いや紅い・・・。辺りを見回すと、ポツンと白色の何かが目に入った。体が思うように動かなかったが、どうにかその白い何かが分かったところまで這って近づくことができた。その白い何かは銀髪、ではなく完全に色が抜けた感じのする白髪の少女だった。顔を見るとその表情は悲しみ、絶望、後悔、懺悔など全て負の感情で染められていた。同時に、この少女を自分は知っている気がした。だが、そんな考えを忘れさせる光景が目に入った。

——この空間の紅を創りだしてるモノ・・・血だらけの“かつての自分”がいた・・・。

不意に視線を戻すと少女はこちらを見つめており、そして“今の自分”に問いかけた・・・。

——イマノアナタハダレナノ？

俺は…いや“僕”はその少女の問いに何も返そうとはしなかった…。

ファイア side

「……こつち来て見た最初の夢がこれかよ…。」

起床時刻は朝の6時。今、ファイアはフェイト達と同じマンションの一室にいる。昨日の騒動のあと、拠点どころか寝床も無いの思い出し、野宿でもしようとしたらフェイトに招かれたのである。見知らぬ男をかんたんに家に泊めちゃダメ！！とアルフと二人で諭そうとしたのだが、

「ファイアはもう知り合いでしょ？」

そういう問題じゃねえ！！という感じの返答をされた。その後何度か説得を試みたが結局ファイアとアルフが先に折れた。いくら協力

関係とはいえ、いつまでも少女と同居する気はないので一日だけという条件で。

「二人はまだ寝てるな…。よし、金作りに行くか。」

異世界から来たフィアは実質無一文である。そのため、しばらくここで生活するにはやっぱりこの世界の通貨が必要であつたが、自分より年下のフェイト達に金をもらうなんて選択肢は自分には無い。別に軍人であるフィアはその気になればサバイバル生活を送れる。だが、彼が所属していた『ベルフィア軍心得十力条』にこんなものがある。

—— 未開の地で生き延びる根性と生活する知恵をつけるべし。

要はサバイバル能力も必要だが、異国の文明にすんなり馴染む技能も必要であるということ。自分が滞在する未開の土地の人間は敵にも味方にもなる。故に相手側を理解し、可能なら味方にするだけの手腕を身につけるようにしろという意味がある。もともと、フィアはそこまで忠実にこの心得に従ってはいない……。

「それにしても…、また“あの時”の夢を見るとはな…。」

今朝、自分が見た夢を思い出し思考にふける。あの夢は自分にとって忘れない…、いっそ否定したい過去であるが、同時に“今の自分”

を存在させている過去である。故に、否定すれば自分とこれまで自分に関わったものまで否定することになる。だから今までこのことは極力考えないようにしてきたのだが…

「まさかコレに関係することが近々起きるってか？・・・いや起りようがないか・・・。」

考え事をそのへんで中断し、流石に無断で消えるとマズイのでフェイトとアルフ宛に『少し出掛ける』という内容のメモを書いた。

「んじゃ、行つてきます。」

まだ寝てるであろう二人を起こさないように、フィアは静かに家を出た。ベランダから…。とんでもない高さから跳び降りたにも関わらず、フィアは綺麗に、静かに着地した。そして、自分にしか聞こえない程度の小さな声で呟いた…。

「俺は僕だよ」・・・エルミア・・・。」

——夢で逢った白髪の少女、かつての初恋相手の問いかけにそう答えた・・・。

第八話（後書き）

今後の伏線にするつもりのフィーアの過去

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0721x/>

漂流者はハイブリッドな現役将校

2011年10月11日12時58分発行